近代都市公園の発生と展開に関する研究

——ニューヨーク・セントラル・パークのデザインについて——

内 山 正 雄*

Studies on the Growth and the Development of Modern Public Parks ——On Design of the Central Park, New York City——

by Masao UCHIYAMA*

序

1965年6月、ニューヨークのセントラル・パーク (Central Park) は、アメリカ内務省国立公園局 (National Park Service of the Department of the Interior) より、ナショナル・ヒストリック・ランドマーク (National Historic Landmark) に指定された¹⁾。その設計者、フレデリック・ロウ・オルムステッド (Frederick Law Olmsted, Aug. 26, 1822~Aug. 28, 1903) は、造園界のみならず、アメリカ史上、重要な人物の一人として脚光をあび、最近に至り、その伝記並びに業績等に関する研究書が極めて多く出版されるようになってきた。また1972年秋には、the Whitney Museum of American Art 及び the National Gallery of Art において、オルムステッド生誕150年を記念する展覧会が開催されている。

面積840エーカー (約340ヘクタール) のセントラル・パークが、或る日突然、ニューヨーク市の中心に、オルムステッドの創意あふれるアイデアのもとに完成したかのように思われがちであるが、事実はそのようなものではない。セントラル・パークの出現も、オルムステッドのアイデアも、当時の社会情勢、都市の発展を洞察したドウニング (Andrew Jackson Downing, Oct. 30, 1815~July 28, 1852) 及びブライアント (William Cullen Bryant, Nov. 3, 1794~June 12, 1878) らのキャンペーン、さらに遡って、イギリスの風景式造園運動並びに都市公園の萌芽等の背景があり、それらの集積があってここに開花したものである。とはいうもののオルムステッドの業績が少しも減少するものでないことはいうまでもない。ルイス・マンフォード (Lewis Mumford, 1895~) が、「ル・コルビュジェの現代建築も、クラレンス・ペリーの近隣住区の理念も、多くの拡散した努力を一つに結晶させたという点で、劇的な価値をもつ。」²⁾ といっていることは、そのままオルムステッドの都市公園理念の発展にあてはまる。

オルムステッドのデザインには、いくつかの画期的要素が含まれているが、都市公園の基本デザインという点

では、セントラルパークから今日まで、ほとんど進歩がみられないといっても過言ではない。

本研究は、セントラル・パークのデザインの特異性及び創造性を追求し、その背景に遡り、セントラル・パークの都市公園史における位置とその効果、更には近代都市公園とそれに伴う造園技術の本質を明らかにしようとするものである。

1. セントラル・パークの敷地について

1-1 位置及び規模

セントラル・パークのあるマンハッタン島は、長さは21.44km、最も広い部分の幅3.68kmの細長い島で、「マンハッタン」とは、「丘の島」という、アルゴンキン族 (Algonquin) の言語から由来しているように³⁾、かなりの起伏を有していたが、1811年以降の街路のグリッド・プラン実施に際して、平坦にする切盛工事が行われた。この格子型街路の中にあって僅かに屈曲するブロードウェイは、インディアンのトレール (Trail) の名残りである⁴⁾。

セントラル・パークは、マンハッタン島のほぼ中心から北北東にかけて、島の細長い形状にならう、長方形をなしてその位置を占め、1854年以降の土地買収、1857年8月の着工 (1858年以降の本格的着工以前の清掃、伐根等の段階) の時代には、公園の南端近くによりやく市街地が伸び、周辺街路も工事中であった⁵⁾。

1853年、ニューヨークより市に敷地買収権が与えられた際は、5番街、8番街、59丁目及び106丁目に囲まれた長方形の750エーカー (約300ヘクタール) であり、1857年10月、公園委員会 (Park Commissioners) が、公園デザインのコンペティションを公告したのはこの敷地であった。1858年1月6日、11人の委員よりなる公園委員会は、北の境界106丁目から110丁目までは理論的に公園の一部であり、この土地を追加すべきことなどを議決し、州議会に対し、委員長アンドリュー・グリーン (Andrew H. Green, 1820~1903) の名をもって、1859年1月14日、請願書を提出し、同4月にこれが許可される。その請願書に記された拡張理由は次の通りである。

* 東京農業大学造園計画第二研究室

「106丁目の南側の線で決められた現在の北部境界は、土地の自然地形を無視し、隣接の要素を顧慮していないが、110丁目は自然的境界を明瞭に示している。……106丁目から北側に住宅が建つとすれば、公園からの重要な眺望が妨げられるに相違ない。……しかも、この土地を均らすには大きな費用がかかり、硬岩を40フィートも切取らなければならない。ここを公園に加えることに世論も支持するであろうと信ずる。」⁵⁾

委員会が追加理由としたものは、自然地形の一体性、眺望の遮断及び宅地化する場合の工事費の増嵩の三つである。このうち、眺望については、後年、公園周辺の高層建築により結局妨げられることになるが、まだ十分に

市街化されていなかった島の状況を示している。なお、の請願書に記されていないが、今日ならば十分に拡張理由一つになったであろうものに、この地域に残るブロックハウス (Block house) のような、1814年の英軍侵入に備えて設けられた一連の砦が考えられる。しかし、このような文化財の保護が掲げられていないのは、当時のアメリカ国民の文化財に対する認識の一端を物語っているといえよう。かくしてこの拡張により、公園の規模は、840エーカー (約340ヘクタール) となる。

1-2 地形、地質、植生

セントラル・パークの地形については、既に1853年以来、エグバート・ヴィーレ (Egbert L. Viele, 1825~1902) が調査していた。ヴィーレは元軍人で、1856年から1858年までセントラル・パークの技師長 (Chief Engineer) であって、スーパーインテンドントに任命されるオルムステッドの上司にあたる。ヴィーレは自費で、敷地の予備的地形調査及びこの調査に基づく全体計画を公園委員会に提出していた。しかし、この地形調査図は極めて簡単なもので、等高線も入っておらず、どの程度設計競技及び実施設計に役立ったか不明であり、これについてオルムステッドも「不正確な地形図」と評している⁶⁾。

ヴィーレの調査もさることながら、オルムステッド自身の報告書⁷⁾、その他にも原地形についての詳細な記載がほとんど見当たらないが、全般的に、敷地は起伏の激しい、かつ岩石の露頭の多い土地といえる。なお、詳細に観察すれば、古貯水池 (old reservoir) の北側85丁目を結んだ線を境にして、地形的に南北二つに分割することができる。オルムステッドは、この線から北半分をアップパー・パーク (upper park) とし、南半分をロウヤー・パーク (lower park) と名付けた。この二部分それぞれの地形について、オルムステッド及びヴォー (Calvert Vaux, 1824~1895) の当選作品グリーンズワード・プラン (Greensward plan) に添付された説明書 (Description of a plan for the improvement of the Central Park, "Greensward", 1858) には、次のように記されている⁵⁾。

第1図 セントラル・パーク位置図とマンハッタン島の人口推移

第2図 セントラル・パーク敷地断面図
(Elizabeth Barlow : Frederick Law Olmsted's New York よりアレンジ)

「アッパー・パークは険しく波打っており、各斜面は広い面を有している。この特質は公園として最高の理想であって、都市のフォーマルな線とコントラストをなしている。……貯水池と 106 丁目との間の土地は一体として考えられ、この特質の統一は造園細部に至るまで厳格に保存すべきである。」

このようにアッパー・パークは急斜面の丘陵が多く、またここに記されていないが、滝のある小川で結ばれる三つの水面があった⁵⁾。また、ロウヤー・パークについては、「ロウヤー・パークは、その性格において異質なもののから構成されており、変化ある処理を要する。そのランドスケープにおいて最も重要な要素は、貯水池の南側の岩石多く、樹木の生えている山腹である。(中略)ロウヤー・パークの中央部と西部とは不規則な台地で、東部は優雅な起伏よりなる。(中略)、最南端には若干の平らな沖積の草地があるが、険しい絶壁もあって、構成上この部分に独立性を与えるのに役立っている。」と記しているが、この他に湿地と多くの水路が散在していたのである。

なお、敷地内で 3 番目の標高を有するグレート・ヒル (Great Hill, 134フィート) は、アッパー・パークに、最高点及び 2 番目のサミット・ロック (Summit Rock, 137フィート余) と、ビスタ・ロック (Vista Rock, 135フィート) は、ロウヤー・パークに所在している。

マンハッタン島は、三種の岩石で構成されており、すなわち、インウッド大理石 (Inwood marble)、フォードム片麻岩 (Fordham gneiss) 及びマンハッタン片岩 (Manhattan schist) で、このうち、片麻岩は公園内に少なく、一方、片岩は敷地全体に見られ、これは雲母を含み板状質で、質はあまり良くないが建築用材にすることができ、オルムステッドは公園境界ウォールの基礎に利用している。

植生については、敷地一帯にキイチゴ属 (bramble) が多く、オルムステッドは「悪臭の植物、毒気のおいしが大気を汚染している。」⁶⁾ といっている⁷⁾。施工前には 42 種の植物が生育しており、落葉樹が多く景観的に貧弱であった。後にランブル (The Ramble) としてオルムステッドが設計した、古貯水池南斜面の樹林地は、岩石の大きなマッサが多数露出し、土壌はやや湿度を有し、sweet-gum (*Liquidambar styraciflua* L.), spice-bush (*Lindera benzoin*), tulip-tree (*Liriodendron Tulipifera* L.), sassafras (*Sassafras albidum*), red-maple (*Acer rubrum*), black-oak (*Quercus velutina*), azalea (*Rhododendron*), andromeda (*Pieris floribunda*) 等が生育し、複雑な景観を呈していた¹⁾。

1-3 工作物及び土地所有状況

用地買収を開始した 1853 年頃の敷地内、殊にロウヤー・パークには 300 以上の不法占拠者の小屋、骨焼場、台

所屑処理場及び豚飼育場が散在して極めて不潔で、これらの立退には警官が出動した¹⁾。

敷地のほぼ中央部に二つの貯水池があり、古貯水池 37 エーカー、新貯水池 106 エーカー、計 143 エーカーは、公園敷地の 6 分の 1 を占め、公園を南北に二分しているが、古貯水池は後に廃止される。

西 106 丁目に近いグレート・ヒルに、ボガードス・ハウス (Bogardus House) という建物が残っており、オルムステッドは、しばらくここに居住し、弟ジョン (John Olmsted) の未亡人と結婚したのもこの家である。この建物は 1890 年代に市公園局 (the Park Department) の手により撤去される²⁾。

東 104 丁目近くにあるマックガウン家 (the McGown) 所有の建物は改築されて、ここに the Academy and Convent of St. Vincent が設立された。

5 番街に面し、東 64 丁目に近く、アーセナル (the Arsenal) があり、1848 年、州が建設して南北戦争中、兵舎として使用、後にここに公園局が入り、3 階ホールにオルムステッドの設計競技当選案が展示されている。

土地所有状況については、市有地として前記の二貯水池 143 エーカーと、州有地のアーセナル 10 エーカーとが公有地で、全敷地面積の 17% を占め、これが公園地選定の一つの理由に少しはなっていたであろう。しかし、その他の土地は約 7,500 の多数の宅地所有者に細分され、そのロット数 (筆数) も 17,000 にのぼり、1853 年から 56 年にかけての買収時に多くの異議申し立てがなされている¹⁾。

2. オルムステッドと設計競技

1857 年 8 月、オルムステッドはコネチカット州の海岸リゾート、モリス・コーヴ (Morris Cove) の宿屋で、“A Journey in the Back Country in the Winter of 1853~54” (1860 年発行) の原稿を校訂していた。たまたま、セントラル・パーク委員会委員の一人が同宿し、この人の勧奨によりオルムステッドはスーパーインテントになる。この委員の氏名について、多くの研究者は、その名前をあげていないが、エリザベス・バーロウ (Elizabeth Barlow) のみが、チャールズ・エリオット (Charles Willis Eliot, 1834~1926) と断定している²⁾。というのも、オルムステッド自身の論文、報告及び手紙にも明らかにせず、息子のオルムステッド・ジュニアの著書でもエリオットであったろうと推定しているにすぎないからである。バーロウの指摘を裏付けるとするならば、エリオットが評論家チャールズ・ブレース (Charles Brace) の親友であり、ブレースはまた、オルムステッドの弟ジョンのエール大学時代のルームメイトであって相互に以前からの知友であって³⁾、その人格、識見をよく承知していたからで、はじめて会った見知らぬ人にス

ーパーインテンドントのような重要な職を推薦することはないであろう。

技師長 (Chief engineer) とスーパーインテンドント (Super intendent) の任務については、モリス・コーヴにおけるエリオットとの会談、及び1857年9月11日付のオルムステッドが弟ジョンにあてた手紙⁵⁾によれば次の通りである。

技師長の任務は、委員会の指導監督のもとに、公園に働くすべての人の統制、指揮及び責任をもち委員会が決定するプランを実行し、委員会が指示する運営を企画し指揮することである。また、スーパーインテンドントの任務は、工事中、労働者の義務遂行に留意し、怠慢があれば技師長に報告し、工事の実施及び完成部分の保存について技師長に協力することと、なお条例規則の遵守、公園の保安について責任をもつこと等である。このように技師長は委員会の命をうけ、スーパーインテンドントは技師長の命によりその責務を遂行するようになっており、後にオルムステッドはヴィーレ退任後の双方を兼ね、全体プラン、実施設計、同予算について委員会ことに会計書記の承認を得る等に彼の苦斗が始まることになる。

1857年9月10日、オルムステッドは俸給 1,500ドルでスーパーインテンドントに任命される。この日は公園委員会の第1回会議であったが、セントラル・パークのプラン募集についての公告、仕様に関する特別委員会報告が承認され、10月13日に公表される。これより先、ヴィーレの作成した案は、1856年6月3日に一応受理されていたが実施には移されず、既に着手されていた公園事業は清掃に限られていた⁸⁾。

設計競技に関し委員会が定めた賞金と条件は次の通りである¹⁾⁵⁾⁶⁾⁹⁾。

賞金については、1等賞 2,000ドル、2等賞 1,000ドル、3等賞 750ドル、4等賞 500ドルとし、入賞デザインは委員会に帰属し、対象敷地は59丁目、106丁目、5番街、8番街に囲まれた、長さ2½マイル、幅½マイルの約750エーカーで、うち、クロトン水道貯水池143エー

カーは保存することとされ、更にその他の条件として、

1. 経費は法律により承認された額すなわち、1,500,000ドルとすること。
2. 東から西へ4本もしくはそれ以上の横断道路を、59丁目と106丁目との間に設けること。
3. 20～40エーカーのパレード・グラウンドを観覧者のための設備とともに選定すること。
4. 3～10エーカーのプレイグラウンドを考慮すること。
5. 展示会、音楽会等のためのホール敷地を予定すること。
6. 主体となるような噴水と展望塔を各一つ考慮すること。
7. 2～3エーカーの花壇敷地を保留し、その設計をすること。
8. 冬季スケート場となるスペースをとること。

なお、縮尺は1インチ当り100フィート、図面寸法は長さ10フィート2インチ、幅2フィート3インチとし、仕上げは墨入れとセピアの他彩色をせず、提出期限は、1854年4月1日である。この公告は新聞紙上に掲載されたが⁹⁾、20行の簡単な記事で、細部については委員会から直接応募者に示される。委員会としては敷地の位置と形状から、東西に分割された町の連絡上、横断道路を必要としたことは当然であるが、公園の最低施設をパレードグラウンド、プレイグラウンド、ホール、噴水、展望塔、花壇並びにスケート場の7つとしたことに、当時の都市公園に対する認識を伺わせるものがある。

オルムステッドはドウニング (前出) の後継者で建築家のカルヴァート・ヴォー (Calvert Vaux, 1824～1895) からの協同設計についての勧誘を受諾し、昼間は1,000人の労働者を監督しながら、夜間と日曜日に図面を仕上げていった。彼らのプランは、「グリーンスウォード」 ("Greensward") という署名で、締切最終日に委員会に提出される。

1858年4月28日、委員会は33組の作品のうち、このグリーンスウォード・プランを11票のうち7票の賛成で1

第3図 グリーンスウォード・プラン略図：1858

A PLAY GROUND	D LAKE	G TOWER
B PARADE GROUND	E OLD RESERVOIR	H ARBORETUM
C MALL	F NEW RESERVOIR	I POND

等賞とした。このように満票でも、圧倒的多数でもなかったことは、反対票の委員が古典的デザインまたは記念性を重視したものと考えられる。なお、その他の入賞者は次の通りである。

2等賞 サミュエル・ガスティン (Samuel I. Gustin, セントラル・パーク植栽担当スーパーインテンデント)

3等賞 ミラーおよびマッキントッシュ (Miller and McIntosh, オルムステッドの2人の部下)

4等賞 ハワード・ダニエルズ (Howard Daniels, 建築家)

このように1等から3等までセントラル・パーク関係者により占められていたことは、いかにも敷地の状況を熟知している者が有利であったようであるが、地形を最大限に活用したばかりか、画期的アイデアを盛りこんだのがグリーンスウォード・プランだったのである。

4. グリーンスウォード・プランの基本理念と特色

オルムステッド及びヴォーの1等当選案グリーンスウォード・プラン以外の応募者のプランは、市の紋章を象った花壇、自由の女神像の脚元から13州を象徴して湧出する13本の水流、泉池の中に立つジョージ・ワシントン像といったモニュメンタル性の強調、または極端に屈曲する園路がデザインの主体を構成し、大都市におけるオープンスペースの役割を深く認識したものは皆無といっ

てよい。ヴォーが設計競技のパートナーとして、オルムステッドを選んだ理由は記録に残されていない。ヴォーがドウニングの事務所で作園の理論と実際を学んでいた一方、オルムステッドは文筆家として若干の名声があり、建設現場責任者としての実際面はその緒についたばかりであって、強いて理由を考えるとすれば、オルムステッドには農場経営の体験があること、当時は現地に勤務して敷地の状況を熟知していること、文筆活動を通じて公園及び風景に対する高度な識見をヴォーが高く評価したのであろう。プラン作成にあたり、アイデアはオルムステッド、製作技術面はヴォーが担当したことも当然である。

4-1 基本理念

オルムステッドがグリーンスウォード・プランを作成しようとする段階において、都市公園についていかなる理解を有していたかを考察することは、このプランの評価に当り極めて重要なことである。

パーク (Park) という言葉が表現する内容についてのオルムステッドの理解については、ブルックリンがプロスペクト・パーク (Prospect Park) を建設する際、その公園委員に対して、彼が提出した1866年の報告書からうかがうことができる⁵⁾。

「パークにはいろいろな意味があるが、われわれが興

味をもっていることは、何世紀か前に狩猟地にその言葉をあてはめたことである。狩猟地として選ばれる土地は動物にとり豊富な草、清い水に恵まれ、暖かい日光から日陰へと移動容易な場所である。水の豊かな谷間、森、点在する樹木、ゆるやかに起伏して陰しくない土地である。そして遊び仲間が時にこのパークで出会い、この出会いが生ずるとき、かれらの楽しみが増大することが見出された。(中略) ついで人々は会話の楽しみは、その風景や特殊な共同精神に関係することを認めるようになった。(中略) その後、趣味や想像力を満足させる風景の中をレクリエーションとして動きまわりたいという人々に、便利な施設として関心がもたれ、維持され始めた。(中略) われわれのパークのアイデアはこれらの経験から発しなければならない。」

オルムステッドは狩猟地のランドスケープとしての要件を、狩猟動物が生きていくための側から考察し、人間もこのような土地に魅力を感じること、更に狩猟人たちの社交に続いて、レクリエーションとしての風景のなかの移動について言及し、公園のアイデアの発生をこれらに求めている。

セントラル・パークがその名称のように、マンハッタン島の地理的中心であるばかりでなく、当時パークの南端近くまでしか建蔽されていなかった市街地が、極めて近い将来建築物で充満し、この公園地が唯一の非建蔽の中心となるであろうこと、公園以外の自然風景は全く消滅するであろうこと、すなわち、巨大なメトロポリスの住民にとり、セントラル・パークは唯一の自然の経験となるであろうと次のように推察した⁵⁾。

「ニューヨークが建物で充満し、単調な直線街路の列、高いビルディング群に変わる時がやってくるだろう。(中略) セントラル・パークを除いてはその現在の変化ある表面が残るということは考えられない。その時、この敷地の現在のピクチャレスクなアウトラインの極めて貴重な価値が判るだろうし、その目的に対する適合性は全面的に認識されるであろう。」とし、市街地拡大の確実性並びにニューヨーク都市計画事業の性格(街路の単調なグリッド・パターン、大切盛工事による地形の平坦化)を、人間心理に大きなマイナスの影響を与えるものと確信していたのである。

かくして、オルムステッドが心に描いた公園とは「いなか」の状態の無限の連続、すなわち、牧歌的風景と森林の風景との芸術的混合に対する示唆であって、また、山岳、海洋のような大自然風景でもなく、人間生活に密着した親しみのある風景である。

グリーンスウォード・プランに添付した説明書は、彼のデザイン理念にふれておらず、ほとんど施設の解説に終始したが、1872年の The Landscape Architects の “A Review of Recent Changes, and Changes which

have been projected, in the Plans of the Central Park”⁵⁾ によれば,

「公園全体が一個の芸術作品である。芸術作品の一般法則に従い、単一かつ高貴なモチーフにより枠づけられ微妙な方法ですべての部分が合流し、お互いに補足しあうべきである。(中略) この公園の一つの大きな目的は、いなかで夏を過ごす機会のない何十万という疲れた勤労者に、神の創造物の見本を提供することで、ホワイト・マウンテン (White Mountain)¹⁰⁾ やアディロンダックス (Adirondacks) の 1～2 カ月に相当するものを近くの環境に提供すること。」であった。

商工業の発達、都市生活の非人間的的局面に対する鎮静剤、解毒剤として、自然崇拜を刺激したと、バーロウ (Elizabeth Barlow) はいっているが⁹⁾、既にエマソン

(Ralph Emerson, 1803～1882) は、森は人間を正気にかえらせ、健康を取り戻させ、本来の自分にかえらせてくれるとした¹¹⁾。当時の都市住民はマンフォード (Lewis Mumford) のように「気違いじみた雑踏から逃がれよう」¹²⁾ とし、富裕な人びとは芸術家や文筆家の発見した風景地に逃避することができた。遠方の自然風景地に行くことのできない勤労者にとり、敷地の現在のアウトラインを金銭に換算できない価値あるものとしたのである。

なお、敷地周辺が、高い建物で囲まれることを考慮し (オルムステッドはその高さを万里の長城の2倍の高さと表現しているが、1811年の都市計画図では建物は4階建とされている。)⁴⁹⁾、緑の障壁でホライズンを確立し、いなかの風景の無限性を周辺樹林帯によって構成しよう

第4図 セントラル・パーク改良計画略図：1868

① PLAY GROUND	④ THE MALL	⑦ UNFINISHED GROUND
② THE GREEN	⑤ OLD RESERVOIR	
③ LAKE	⑥ NEW RESERVOIR	

とした。この樹林帯には街路歩道の並木が含まれ、その樹種としてピンオーク (Pin Oak) が採用され、20世紀に入るまで視覚的スクリーンとして目的を果していたのである。

オルムステッドの意図した牧場的(牧歌的)風景 (Pastoral landscape) は、1868年の改良計画でようやくその名称も、ザ・グリーン (The Green)、ノース・メドウ (North Meadow) となって実現するが、大都市住民に対し、オルムステッドの言葉を借りるならば⁵⁾、「リフレッシュ」を与えるためには、フォーマルなランドスケープにより、都市的連想をおこさせるより、牧場的タイプの風景がより有効であるとともに、人工的にも造成が可能であったのである。

4-2 サンクン・トランスヴェース (Sunken Transverse, 堀割横断道路) の発想

「いなかの状態」をデザインするためにオルムステッドが苦心した公園地の長方形の形態は、東西に分断された市街地の連絡にも影響したのである。設計競技の条件にも「東から西へ4本もしくはそれ以上の横断道路を、59丁目と106丁目との間に設けること。」と提示されている。この条件をうけて、他の応募作品が公園地盤と同一

レベルで横断道路を設けているのに対して、オルムステッドの案は、公園地盤よりも低くした堀割道路 (underpass, sunken transverse or sunken thoroughfares) としたことに彼のデザインの偉大な特色の一つがある。

この案の先例として、ロンドンのリージェント・パーク (Regent's Park) 内に1850年に設けられたアンダーパスが既に存在し¹³⁾、1856年にオルムステッドが再度イギリスを訪れた際に、彼の鋭い観察がこれを見逃すということはありません、これがヒントになっているというのが大方の研究者 (N.T. Newton, A. Fein, E. Barlowら) の意見であるが、オルムステッド自身の報告書、手紙等には、この点についてふれていない。グリーンズウォード・プランを1858年に若干修正した際の説明書 (Description of a plan for the Improvement of the Central Park, "Greensward" 1858)⁵⁰⁾において「外国の例」という項目の下に、「これらの公道は十分に照明され、警官に追われた泥棒が公園の暗がりには逃げこまないように、高さ6～8フィートのフェンスがウォールが必要になる。このような保安設備をもつ公道が、ロンドンのリージェント・パークの動物園を通過している。そこでは公園の車道や園路と交差するところに門を取付け

それほど大きな不便もなく、景観上悪くもない。(中略)チュイレリー (Tuileries) の庭園を横断する通過交通は、夜間は門を閉じ、人は右か左に遠廻りしなければならない。」とあり、公園を横断する道路にはふれているが、主としてその保安と美観について考察し、堀割道路についてではない。しかも平面交差について景観上反対もしていない。

そこで、セントラル・パークの堀割横断道路のヒントは、むしろ次の文章から推定することができよう。すなわち、「セントラル・パークの形態と位置とは特殊であって、先例としては、広い公園よりもヨーロッパの古い都市の細長いブルーパールに求めるべきである。多くの例によればその並木道 (alleys) を中断しないようにするために、そこを横断する街路は、土手道 (causeway) の形態をとり、高いアーチでまたいでいる。」

オルムステッドは堀割横断道路の先例をリージェント・パークではなく、これを大陸のブルーパールに求めたのであって、セントラル・パークの長さが幅の5倍もある細長い形態の特質を適確に把握した結果である。とはいえ、リージェント・パークの動物園を横断するアウター・サークルが動物園敷地を分断し、两部分の連絡にアンダーパスを実施した事例が彼の記憶にあって、この立体交差方式を裏返した形で、道路レベルの方を低くし、公園中心のデザインを採用したということも全く否定することはできないが、むしろブルーパール線上の利用者重視の思想の方が、公園利用者を重視する彼の理念により近いのである。とはいえ、バロック・デザインの特色である無限の空間に続くようにみえるブルーパールのビスタを、公園全体の基調にしなかったのも、前述の基本理念に相反するからである。

東西の街区から発生し、公園地内を横断せざるを得ない、しかも公園利用者と全く関係のない都市交通、特に石炭車、物売車、ごみ車、こやし車といった不快感を与えるもの、或いは急速に通過する消防車を視覚から排除し、「いなかの状態」の連続性を破らないための解決策として、堀割横断道路を徹底してデザインしたことはオルムステッドの大きな功績である。彼は街路交通の圧力がますます高まるであろうことを予測し、立体交差方式により公園風景への街路交通の侵入を避け、かつ、公園内の通過交通を排除するよう、公園道路を計画し、警察規制まで考慮した。

なお、この案の採用実施を容易ならしめたものにマンハッタン島の起伏の激しい地形の特色がある。島が全くの低い平坦地であったならば、当時、技術的に不可能に近かったし、たとえ可能としても堀割工事と維持に多額の費用を要し予算面から制約されたことであろう。

4本の堀割横断道路の線型は街路の厳格な直線をそのまま通さず、緩やかな曲線をもって両端を連結している

が、地形及び貯水池の位置によるとはいえ、ブリッジ上からの眺望に対し都市的なものを避ける効果を発揮している。この4本は東65丁目と西66丁目、東79丁目と西79丁目、東85丁目と西86丁目、東97丁目と西97丁目とをそれぞれ連結している。第5図にみるように各路線は敷地内の谷の部分ではなく、山の部分に選定されていることに注目したい。これは横断道路を公園利用者の視野から排除しようという目的に合致している。しかも、その擁壁の高さは7フィート、その上に土堤を築き、斜面には植栽を施した。東西同じ番号の街路を連結していないものが2本あるというのも地形上の影響である。106丁目から北に110丁目まで公園地が拡張された後も、堀割横断道路は4本のみで追加はされず、改良計画において北側2本は更に滑らかな曲線が採用されている。

4-3 交通分離システム

グリーンスウォード・プランは公園内に車道 (drives) 乗馬道 (bridle trail)、歩道 (footpath)、堀割横断道路 (sunken thoroughfares) の4種類の交通分離システム (four separate traffic system) を計画した。車道は貸馬車 (hackney coaches) と乗用馬車 (carriage) のため12カ所の入口をもち、路線は敷地の長方形の形態にならない、南北に長く曲折するイースト・ドライブ (east drive) とウェスト・ドライブ (west drive) の2本を、ほぼ東西方向の4本の車道で連絡し、できる限り等高線に沿うようにした。その線型に直線を採用しなかった理由について、オルムステッドは一般直線街路におけるように、馬車による速足競争を誘発させて公園の静寂を損わないためとしている¹⁾。街路を馬車で真直ぐ飛ばす楽しみは、16世紀の馬車の技術的改良以後、バロック都市ですでに始まっていた⁴⁹⁾。しかし、その他の大きな理由として、イギリス風景式庭園並びに田園風景を描こうとしていたことがあることはいままでもない。車道の総延長は6.5マイル (10.46km) である。

乗馬道は幅員60フィート、延長4.5マイル (7.24km) で、公園地全体を屈曲し、車道並びに歩道との交点ではアンダーパスとし、馬車利用者と歩行者とからは、ほとんど乗馬道が見えず、相互の干渉を避けている。

歩道には、車道に沿うもの、施設内のもの、各施設を連絡するもの等があり、或いは広い開けた場所を通り、或いは樹林内を通過し、大きな草地ではその縁辺部を周回する。一部の歩道は車道に沿い、歩行者をして通過する馬車とその乗客を眺めさせ、或いは両者のコミュニケーションを図った。歩道の延長は58マイル (93.3km) に達し、不規則な地形にあわせた設計を後年、ルイス・マンフォード (Lewis Mumford) も賞讃している²⁾。

これらの交通分離システムの特色は、利用形態の分離を完全にし、その混乱と事故を防止し、それぞれのアメニティの向上を図り、公園風景の十分な享受を達成しよ

うとしたことであり、どのシステムにおいても曲線を基調にし等高線にできる限り逆らっていない。公園において歩行者と車のための交通を分離するアイデアは、既にイギリスのリヴァプールにあるバーケンヘッド・パーク (Birkenhead Park) に見られるが、オルムステッドは更に立体交差方式によりこれを徹底したものである。この画期的なアイデアは、ニュージャージー州のラドバーンにおいて、ヘンリー・ライト (Henry Wright, 1878~1936) とクラレンス・スタイン (Clarence Stein) が実施した合理的な道路計画に先立つこと60年である。

4-4 フォーマル・パターン (Formal Pattern)

セントラル・パークのデザインは、いなかの状態の表現であるから全般的にインフォーマルな形態を主調にしているにもかかわらず、フォーマルなものが数カ所にわたってみられ、そのうち最も顕著なものが、ザ・モール (The Mall) である。このモールのように他の風景に対し違和感を生ぜしめ、附近の敷地を二分してしまうような要素を導入した理由についてオルムステッドは、敷地の南東隅 (5番街を59丁目との交点) に設けられる入口を最も利用者の集中する所とし、多数の人が往来し、散歩し、コミュニケーションするために最も適合する形態を、広幅員で緑陰のある並木道と考えたのであり、これもパークの起源に対する彼の解釈の一つの表現である。

モールを南東隅に配置する場合、その方向を公園境界の直線に平行せしめず、これと約13度の角度をもって南東から北西に軸を傾けているために、パラレル感を破りダイナミックな感覚を与えている。しかし、これも公園南東隅から最高点のビスタ・ロックをモールの焦点とすれば当然この方向をとらざるをえず、地形と利用者集中地点とがアイデアの展開に幸いしたものである。

グリーンスウォード・プラン添付の説明書において、「樹木のシンメトリカルなアレンジメントは、全般的原則に反するが、平坦で広々とした大ブロムナードを施設として含めることは、大都市の公園の基本と考える。これに反対する理由は公園を二つに分割してしまうことであるから、どこにおけば全般的効果の犠牲を最小限にするかの決定が望ましい。(中略)そしてそれ自体で完結すべきだと考え、車道の一部とはしない。」としている。オルムステッドは本来、自然美及び自然風景を好む傾向をもっていただけられるが、特殊条件の下ではフォーマルな取扱いの適合性と美とを理解していたのであってこのことは後年のシカゴ万博のデザインに開花を見るのであって、単純に一方から他方へ思想を変えたというものでない。また、ドライブを目的とするためには延長2~3マイルは必要と考え、このモールの延長4マイルでは不十分であり、むしろ、日陰の散歩道、或いは交際する場所としてとらえ、公園に近代的解釈を与え、他の車道とは分離してその独立性、他の風景との隔離を図っ

たのである。

5. 要 約

本論はニューヨークのセントラル・パークのデザインに関する諸問題の一部について論じているが、その背景及び将来への波及効果についてはふれていない。いわば都市公園の発生と展開の序論的性質のものである。セントラル・パークの位置、規模、地形、地質及び植生並びに公園委員会の設計競技に際しての条件を示し、これら諸条件に対するオルムステッドの解答、すなわちグリーンスウォード・プランにみられるデザイン理念及び特色について追求している。

1. オルムステッドは「パーク」の起源を考察し、狩猟地のけもの¹⁾の生活に最適な環境が、人間の自然の経験にとっても適しており、かつ狩猟人たちの出会いが都市住民のコミュニケーション及びレクリエーションに発展しうるものとした。

2. デザインの基本理念を「いなかの状態」の表現にあるとし、これを牧場的風景と森林的風景の二つのタイプに求めた。その構成にあたり、敷地の地形を尊重し、その特質を活用しながらも単なる自然保存ではなく、全体を一個の芸術作品としてデザインした。

3. 堀割横断道路のアイデアは、ロンドンのリージェント・パーク動物園の先例によるといわれているが、敷地の極めて細長い形態を、ヨーロッパ大陸都市のブルバールに比較し、これに重ねて、動物園の立体交差の上下関係を逆転せしめ、公園利用者の視覚を優先させたものである。

4. インフォーマルな「いなかの状態」のなかに、人々のコミュニケーションのためとして、フォーマルなザ・モールを計画し、特殊な条件の下ではこのような形態に理解を示したが、その配置の成功には地形とアプローチが大いに寄与していると考えられる。

参 考 文 献

- 1) Reed, Henry Hope and Sophia Duckworth: Central Park, second edition, Clarkson N. Potter, Inc. New York, 1972, p.p. 18, 19, 27, 30, 52, 103
- 2) Mumford, Lewis: The Urban Prospect, Harcourt, Brace & World, Inc., New York, 1968, p.p. 65, 79
- 3) Stokes, I.N. Phelps: The Iconography of Manhattan Island, 1498—1909, Doda Robert, New York, 1918, p. 15
- 4) Michelin: New York City, Michelin Tire Corporation, New York, 1971, p. 27
- 5) Olmsted, F.L. Jr. and Kimball, Theodora: Forty Years of Landscape Architecture, Central Park,

- F.L. Olmsted Sr., The Mit Press, Cambridge, Mass. and London, 1973, p.p. 19, 21, 37, 52, 117, 211, 214, 240
- 6) Fein, Albert : Landscape into Cityscape, F.L. Olmsted's Plans for a Greater New York City, Cornell Univ. Press, York, Pennsylvania, 1968, p. 52
- 7) Roper, Lawra Wood : A Biography of F.L. Olmsted, The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore and London, 1973, p.p. 19, 33, 135
- 8) Barlow, Elizabeth : Frederick Law Olmsted's New York, Praeger Publisher, New York, 1972, p. 6
- 9) The New York Herald, New York, Oct. 30, 1857
- 10) Anderson, John and Stearns Morse : The Book of the White Mountains, New York, Balch & Co., 1930
- 11) Emerson, Ralph Waldo : Nature, 1844, 酒本雅之訳, エマソン論文集, 岩波書店, 東京, 1973, p. 151
- 12) Mumford, Lewis : The Culture of Cities, 1938; 生田勉訳, 都市の文化, 鹿島出版会, 東京, 1974, p.p. 217, 225
- 13) Chadwick, George F. : The Park and Town Architectural Press, London, 1966, p. 184
- 14) Fabos, Jullius G., Milde, T. Gordon and Weinmayr, V. Michael : Olmsted, Sr., Frederick Law, Founder of Landscape Architecture in America, Amherst, Mass., 1968
- 15) Tunnard, Christopher : City of Man, Architectural Press, London, 1953
- 16) Downing, Andrew Jackson : A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening, New York, 1844
- 17) Newton, Norman T. : Design on the Land, the Development of Landscape Architecture, the Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1971
- 18) Board of Commissioners of the Annual Reports Central Park, 1857—1870
- 19) Peet, Louis Harman : Trees and Shrubs of Central Park, New York, Manhattan Press, 1903
- 20) Maynadier, Gustavus B. : Report on Soils, etc., in Central Park, New York City, 1911
- 21) Hall, Edward Hagaman : Central Park in the City of New York, 1911
- 22) Parsons, Samuel : History of the Development of Central Park, 1919
- 23) Seltzer, Thomas : the Central Park, Central Park Association, New York, 1926
- 24) Olmsted, F.L. and Vaux, Calvert : Description of a Plan for the Improvement of Central Park, "Greensward", New York, 1858
- 25) Board of Commissioners of Central Park : Reports of Special Committee on Plan, Maylo, 1858
- 26) Descriptive Guide to the Arboretum, accompanying "Greensward" Plan, 1858
- 27) Letter regarding the inspiration from tropical scenery for park planting, to Mr. Pilat from F.L.O. in the tropics, Sep. 26, 1863
- 28) Report from Superintendent (F.L.O.) relative to Trees, Oct. 20, 1857
- 29) Two Letters to the President of the Department of Public Parks from F.L. Olmsted, 1886
- 30) Reports as to certain Proposed Modifications in the Plan, to Board from Olmsted and Vaux, May 31, 1858
- 31) Review of Recent Changes, by the Landscape Architects, 1872. Appendix B 2nd Annual Report.
- 32) Letter regarding improvement of planting details, to President of Park Department (Mr. Sweeny) from O.V. & Co. Nov. 12, 1870
- 33) Letter regardening the System of Walks and Rides to be laid out in the Park, from F.L.O. Sep. 9, 1858
- 34) Sutton, S.B. : Civilizing American Cities, A Selection of Frederick Law Olmsted's Writing on City Landscape, the Mit Press, Cambridge, Mass., and London, 1971
- 35) L. A. Q. Reviews : Going Back to the Father Figure, Landscape Architecture, the Publication Board of the American Society of Landscape Architects, Oct. 1974
- 36) Ashton, Dore : New York, Thames and Hudson, London, 1972
- 37) Barnhart, Clarence L. : New Century Cyclopedia of Names, Appleton-Century-Crofts, Inc., N.Y. 1954
- 38) Jellicoe, G. A. : Studies in Landscape Design, London, Oxford Univ. Press, 1960
- 39) Cleveland, H.W.S. : A Few Words on the Central Park, 1856
- 40) Simonds, John Ormsbee : Landscape Architecture —The Shaping of Man's Natural Environment, New York, F.W. Dodge Corporation, 1961
- 41) The Central Park Association: The Central Park, Thomas Seltzer, New York, 1926

- 42) Wurman, R. Saul, Levy, Alan and Katz, Joel :
The Nature of Recreation, A Handbook in honor
of F.L. Olmsted, Mit Press, Cambridge, Mass.
and London, 1972
- 43) Stein, Clarence S. : An Outline for Community
Housing Procedure, The Architectural Forum,
1932
- 44) Parsons, Mable, ed., Memories of Samuel Parsons,
Landscape Architect of the Department of Public
Parks, New York, G.P. Putnam's Sons, New
York, 1926
- 45) Parsons, Samuel : History of the Development
of Central Park, the New York State Historical
Association, New York, 1919
- 46) Olmsted, Frederick Law: The Begining of Central
Park, New York, American Scenic and Historic
Preservation Society, New York, 1914
- 47) Foord, John : The Life and Public Services of
Andrew Haswell Green, Doubleday, Page and
Company, New York, 1913
- 48) Hall, Edward Hagaman : Central Park in the City
of New York, 16th Annual Report, American
Scenic and Historic Preservation Society, New
York, 1911
- 49) Kouwenhoven, John A. : The Columbia Historical
Portrait of New York, Icon Edition, Harper &
Row, Publishers, New York, 1953, New edition
1972
- 50) 佐藤昌 : 欧米公園緑地発達史, 都市計画研究所, 東
京, 1968

(昭和50年春季大会発表)

Summary

This study deal with about some problems on design of the Central Park, New York City, but don't refer to its background and effects to future, therefore its substance is just an introduction of the Growth and the Development of Modern Public Parks.

First of all it explains the situation, the scale, the environment, the topography, the geological features, and the vegetation of the park land, and the terms of the Competition on the Park Planning offered by the Park Commissioners, then persuade on the idea and the character of "Greensward" plan.

1. Frederick Law Olmsted concluded that the origin of the term "park" is a hunting ground and its appearance is most suitable environment for beasts, same time for human life, and delightful-

ness of an encounter of hunters in park apply to communication and recreation for city dwellers.

2. F.L. Olmsted thought that a basic idea of park design is a creation of "rural situation", and he definitely expressed its situation by two types that is pastoral and woodland scenery. After all he created whole area as one work of art, ont merely reserve nature.
3. By most studies on adaptation of the sunken transfares, a certain person says that it is Olmsted's original idea or the other says that he imitates the underpass of Regent's Park Zoo, London. But his hint should be long and narrow boulevards of continental cities which resemble to the Park's rectangle area.
4. We can see some formal patterns in the Park. For instance, he planned the Mall for the reason of that it is most suitable feature for communication by people. And its succeible disposition benefit by the topography of the lower park.